

☑ 話すこと ☑ 書くこと

☑ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☑ パフォーマンステストでの活用☑ 授業での活用
☑ 課外活動での活用

☑ 家庭学習での活用

実践の
ポイント

自己調整型学習における主体的なAI活用による話す／書くことの量的・質的改善

実証概要

<校数>9校(小学校:8校, 中学校:1校) <人数>885名(小学校:338名, 中学校:547名)
<学年>小学校:第5・6学年, 中学校:第1・2・3学年 <アプリ等> Worldclassroom(株式会社HelloWorld), Gemini
<AI機能について>アプリ 【話すこと】:スコアリング(音読練習), 録画(プレゼン練習), 会話(やり取り練習) 等
Gemini【書くこと】:英作文添削, 表現の提案, アイデア出し 等

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●個々の学習ニーズに応じた「話すこと」の練習(アプリ)

[小学校]表現に音声で十分に慣れ親しんだ後、AIとの対話練習に取り組ませた。AI活用で、抵抗なく英語を話すことができた。その後、発話の内容を、例文を参考にスプレッドシートに打ち込ませた。

[中学校]パフォーマンス課題等の前に、自己の学習状況に応じ、アプリを活用して音読・プレゼン練習をしたり、即興での会話に臨む前にAIを相手にやり取りの練習を行ったりした。

上記のような取り組みにより、教師は、全体の学習状況をモニターし、中間指導・評価等をしつつ、自走できない児童生徒の伴走支援に、より注力できるようになった。

●個々の書く力に応じた英作文添削や推敲(Gemini)[中学校]

「書くこと」の言語活動やパフォーマンス課題において、既習表現の活用、教科書本文や他の生徒の英作文等の参照により完成させた成果物をGeminiに添削させたり、書き加えたほうが良い内容を提案させたりして、文章の正確性を高め、内容を豊かにしていった。教師は、クラウド上で各生徒の英作文の状況をモニターし、手本となる作品に全体を注目させたり、その生徒らしい作品になるよう、助言や支援を個別に行えるようになった。



実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

「話すこと」について、CEFR A1以上の児童生徒が大幅に増えた。AI活用により、児童生徒の発話量が増え、かつ個別指導が容易になったためと考えられる。

校種	事前	事後
小学校	31.4%	37.6%
中学校	37.5%	56.7%

②児童生徒の関心・意欲の変化

「話すこと」について、「リラックスしてできる」と回答した児童生徒が増えた。AIとの会話練習により、人前で英語を話すことへの抵抗感が下がったと考えられる。

校種	事前	事後
小学校	41.4%	48.4%
中学校	35.5%	39.7%

③教師の指導の変化

すべての教師が「AI活用により、児童生徒の発話量・時間が増えた」と回答した。AI活用で個別練習の質と量が担保され、児童生徒間での英語によるコミュニケーションがより円滑になったと考えられる。

校種	事前	事後
小学校	—	100%
中学校	—	100%

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●指導主事による日常的な伴走支援、公開授業、授業動画の県教委サイトへのアップなど

①AI英語活用リーダーの育成：町内全体の英語指導力向上のため、リーダーだけでなく、すべての英語教師に対して、指導主事が日常的に授業に出向き支援を行った。町内すべての英語の授業で、教師と児童生徒のAI活用が見られるようになった。

②成果の普及：研究の成果を広く普及し、かつ、多様なフィードバックを得るため、年2回の公開授業(県内外から計100名以上参加)を実施し、当日の授業動画を県教委のサイト「eコネクト」にアップした。加えて、研修会での実践発表や、教育情報誌等での誌上発表を行った。結果、他の自治体からの問い合わせや視察依頼が増えた。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●教師のAI活用指導力の更なる向上と自己調整型学習の全町的展開、県教委・他市町との更なる連携強化

①成果と課題

授業における児童生徒のAI活用により、発話の量と質を大幅に向上させることができた。中学校においては、書くことの量を大幅に増やすことができた。CEFR A1相当以上の生徒の割合も、3年生で17ポイント増加したが、未だ33.1%に留まっている。

②今後の取組

今年度は、中学校の一部の英語教員により、自己調整型学習における生徒のAI活用の実践が進み、一定の成果を得た。次年度は、すべての小中学校の英語教員による全町的取組を進める。